

# 『唐物語』における作中和歌の位相

猪 熊 範 子

一

『唐物語』という名称の初見文献は源経信仮託の『伊勢物語知識抄』であるとされる。「からこくの事をのみかきたる物語を、からものがたりとなづけ、やまとしまねのことをかきたるをば、やまと物がたりとなづけたり」という一文のみから、『唐物語』の命名が『大和物語』を意識していたとすることは短絡的だが、歌物語に倣った形式や歌ことばの伝統を生かした表現からは、創作に際し作者の念頭に置かれていたのは、『大和物語』や『伊勢物語』に代表される歌物語の世界であったことがうかがわれる。とは言うものの、『唐物語』は元来は和歌とは無関係に伝承されてきた故事を収集したものであって、主眼は話そのものにある。したがって、歌物語の形式を踏襲してはいるが、歌語りなどから派生し、古歌の作歌事情を明らかにする形で物語が展開される、いわゆる歌物語とは多少性質を異にする。

その名のとおりに、『唐物語』に収められた二十七話はすべて中

国の故事に題材を得ている。このため、「この物語が創作物語でない以上、文学としての問題は、その翻訳態度（略）にあると、見るべき」だとする池田利夫氏の見解に代表されるように、翻訳文学という側面ばかりが注目され、研究の多くは典拠との比較検討に限られてきた。しかしながら『唐物語』の各話は、単に漢文を和訳し、和歌を添えたという性質のものではない。吉田幸一氏が言うように「むしろ題材を漢故事にとった物語的な創作」であり、作者の意図は話の伝承にとどまらず、中国故事を素材にした『唐物語』という作品の創造にあったと思われる。

俊成卿女の作とされる『無名草子』には、「されば王子猷は戴安道を尋ね、簾史が妻の月に心をすまして雲に入りけんもことわりとぞ覚え侍る」というくだりがある。これが『唐物語』に拠ることは既に指摘されるところだが、物語論の一節に『唐物語』の内容をふまえた叙述が見られることは、その享受の一端を垣間見せるものだろう。小峯和明氏は和歌的修辞による叙述表現の形成の考察を通して、『唐物語』の形成が歌林苑の場と密接に関わる

ことを示唆している。<sup>(4)</sup>さらに田淵句美子氏は、作者藤原成範と個人的に親しかった人々の間に『唐物語』の熱心な読者層を想定し、製作と享受の場を六条藤家や歌林苑の周辺に想定している。<sup>(5)</sup>

また、所収話の多くが女性に焦点を当てて描かれていることや歌ことばを多用した和文脈からなることは、当時における物語の中心的な享受層が女性であり、彼女たちは和歌や物語に親炙する反面、漢籍にはあまり造詣が深くなかったことに配慮した結果とも考えられる。成範が後白河院に近仕し、女房たちとも親交のあったことは『建春門院中納言日記』の記事にもうかがわれる。<sup>(6)</sup>

中村文氏は、成範が歌林苑会衆と交流しつつも、貴族歌人として王朝的雰囲気強く嗜好したことを指摘しているが、このような成範の活動は『唐物語』成立の基盤としていかにもふさわしく、本作品の性格を考えるうえでも注目する必要がある。

いずれにしても、『唐物語』の意図が故事の伝承に終始するのであれば、かならずしも和歌を用いる必要はない。にも関わらず、あえて和歌を配した理由は何か。それを単なる歌物語への憧れや尚古趣味として片づけることは適当ではない。『唐物語』にとつて作中の和歌は翻案の核として、作品の独自性獲得に不可欠な要素なのである。本稿では、『唐物語』における翻案の手法を、作中歌が果たしている機能から検討したいと考える。

『唐物語』には先行文学に依拠した表現が多くみられる。そのはたらきに関しては、たとえば引き歌による重層的な表現生成の方法などについて小峯氏の指摘があるが、<sup>(8)</sup>本稿では和歌の引用が表現のレベルにとどまらず、物語の構造に直接関係している事

例を第八、第六、第二の三話について考察する。各話に配された和歌は作者の感想を述べるものであったり、登場人物の心情を代弁するものであったりするのだが、同時に先行する物語作品の一場面を想起させ、『唐物語』の物語世界に重ね合わせる、あるいは対比させるという役割を担っていることを明らかにし、漢籍にもとづく物語に物語取りの手法を用いることで、独自の作品としての再生が図られていることを確かめたい。

## 二

それでは翻案の過程を辿るため、まず第八話を見てみよう。<sup>(9)</sup>

むかし町々と云人、長尚書に契をむすびていくとせふれども露ちりたれも心にたがふことなかりけり。花の春のあした月のあきの夜も、もろともにまひを見哥をきゝてあそびたはふるゝよりはかのいとなみなし。かゝれどもわかきおひたるさだめなき世のうらめしきは、おもひのほかにこの夫はかなくなりけり。この女たちをくれたる事をかなしとおもひて、わかれのなみだかはくことなし。みめかたち心ばせなどいとおめづらかなる程に世にきこえたりければ、御門よりはじめて、色をこのむ人ゝねんごろにいどみいひけるを、かぎりなくうしとおもひけり。秋の夜くまなき月をみてまづむかしのかげのみおもひいでられて、

もろともにみしにひかりやまさりけむいまはさびしき秋

の夜の月

いのちはかぎりありといひながら、かくてもいける身のつれ

なさよとぞ思みだれる。かくしつゝ月日をすぎゆけば、燕子樓のうちあれば、ゆかのうへかたはらさびしくおぼえけるまゝには、てづから身づからたちぎせたりけるからころもをとりかさねつゝ身にふるれど、ありしばかりのにほひだになかりければ、いと涙をそふるつまとなりけり。

みるたびにうらみぞふかきからころもたちし月日をへだ

つと思へば

かくしつゝ十二年の春秋をくくりてついにほなくなりけり。

第八話は『白氏文集』『燕子樓』で知られる昶々の物語だが、原詩の表現にとらわれず、かなり自由に書きなおされている。御門をはじめとする色好みたちの求愛を拒み、月を眺める姿からは『竹取物語』なども連想されよう。

物語に配された二首の和歌はいずれも作中人物である昶々の詠歌である。この二首はともに昔を恋うる内容だが、いずれも先行する和歌をふまえて創作されており、一首めはおそらく

もろともに見し人いかに成りにけむつきはむかしにかはらざりけり  
（『統詞花集』秋歌上・七九二 登蓮法師<sup>⑩</sup>）

に拠ると考えられる。登蓮は成範と同時代の歌人であり、歌林苑の会衆でもあった。その上第十四話の「あくるめもなき」という表現は、『統詞花集』秋歌上・八四五番の登蓮歌、「まつのとをさしてかへりしゆふよりあけるめもなく物をこそおもへ」からの引用であることがすでに指摘されており、『唐物語』との関係には浅からぬものがある。措辞が共通することに加え、他の箇所でも

も登蓮歌の引用がみられることを考え合わせると、「もろとも」の歌もまた、登蓮歌に依拠した可能性が高いと思われる。<sup>⑪</sup>次に二首めに目を移そう。こちらは『住吉物語』上巻の侍従の歌をふまえている。

から衣見るにうらみぞまさりけるたちし月日をへだつと思へば  
（『住吉物語』上・三三）

乳母が亡くなり、姫君は乳母の娘、侍従を弔問する。乳母の形見に添えて姫君から届けられた和歌への返歌がこれである。多少の言い換えや語順の移動はあるものの、昶々の歌は、先行歌をそのまま引用したと言ってもよいほどに侍従歌と酷似している。

ただし、侍従のこの和歌は真鍋本や野坂家藏本など広本系の『住吉物語』にしか見られない。『住吉物語』には改作の問題があるが、現存本と『風葉集』所収歌との異同から『源氏物語』以前に広本と略本に分かれて享受されていた可能性も認められており、『唐物語』の作者が侍従歌を有する系統本を目にしたことは十分考えられる。下句の完全な一致や表現の類似が偶然の産物であったとは見なしがたく、『唐物語』の和歌は『住吉物語』をふまえ、積極的に引用したものと解釈して差し支えないだろう。

先行する和歌を引用しながら、あたかも作中人物が詠んだかのように提示する大胆な手法は、おそらく『源氏物語』空蝉巻の最後に倣った試みであろう。また、昶々が侍従の歌に自己の心情を託して口ずさんだとも見ることが可能である。

第八話の叙情と主題はこの和歌に収束されるが、侍従の歌を引用することで、昶々の物語に『住吉物語』の一場面が取り込まれ、

物語取りの効果をあげていることが指摘できる。昶々の述懐に侍従の歌を重ね合わせて世の無常を強調せんと図ったのであろうか。小話であるが二首を配したことによって、昶々が独り過した歲月の重さが感じられる構成になっている。

このような物語撰取の手法は「唐物語」に顕著な翻案の型のひとつであり、作品の独自性を獲得するために自覚的に用いられていることを、引き続き第六・第二話でも確認してゆきたい。

### 三

第六話は「蒙求」の「緑珠墜楼」をもとにした物語である。

昔石季倫と云人ありけり。よろづのたからにあきて世のまづしきをしらざりけり。金谷のそのうち五百のまひゞめをあつめてよろこびたのしむ事よるひるをわかず、このうちに緑珠ときこゆるまひゞめなんあまたのなかにもすぐれたりければ、身にかふばかりあさからずおもへりける。かくて月日をくくるに時のまつり事をとれる人孫秀この緑珠がたぐひなきありさまをきくたびに、ひとづてならざらんことをねんごろにおもへりればたえかねて色にいでぬ。石季倫身をはかなきになすとも心よはからじとおもへるを、この人まけじ心のいちはやさに、つは物をあつめいきおひをきはめて心ざしをやぶる。この時緑珠ははるかにたかき様のうへにゐたりけり。石季倫かの人にてしたがひてゆく／＼めを見あはせてたれゆへにかはかくなりぬるといひけるにたえ忍べき心地せざりければ、ろうのうへより身をなげてしんとするを、身

にまさる物やはあるといさむる人あまたありけれどつるにきかず。

をくれゐてなげかんよりはとときのまにしなんいのちのお

しからなくに

いとかく思とりけむ心のありがたさまいひつくすべからず。

『和漢朗詠集』にもうたわれるように奢侈を以て知られた石季倫は、寵愛する舞姫緑珠をめぐり権力者孫秀と争った結果、捕らえられ殺されることになる。兵に囲まれたとき緑珠は高樓の上にあつたが、連行される季倫の「たれゆへにかはかくなりぬる」という言葉を受けて、楼から身を投じ、死を先にする。

典拠である古註「蒙求」と比較してみよう。

晋書、緑珠石崇之美妓、善吹笛。孫秀挾人索之。崇時在金谷別館。方登清涼台臨清流、婦人侍側。使者以告。崇、盡出婢妾數十人以示之。皆蕰蘭麝被羅縠。曰、任選。使者受命取緑珠。崇勃然曰、緑珠、余所愛。不可得也。使者曰、君侯博古知今、願加三思。崇固不然。使返、報秀。秀怒、遣趙王諶崇。崇正宴於樓上、介士到門。崇謂緑珠曰、我為汝得罪。緑珠曰、当立効死於君前。因自殺樓下而死。崇詣東市歎曰、汝奴輩利余財。刑者曰、知財致害、何不早散之。崇不能答矣。

『唐物語』では、使者とのやりとりや孫秀の讒言、刑場での会話などは省略して故事の骨子のみを抄出していることがわかる。

一見したところ典拠の意識にすぎないと解されるものもないが、じつは本話もまた第八話同様、作中歌を用いて先行作品の世界を想起させる仕組みになっており、さらに本話ではそれによって独

自の物語としての再構築がなされていることが指摘できる。

話末評の前におかれた「をくれゐて……」の和歌は作者が緑珠の心情を代弁したものであるが、創作にあたつては、

おくれるて嘆かむよりは涙河我降りたゝむまづ流るべく

〔平中物語〕第一段・九

あはれとききみだにいはいばこひわびてしなんいのちもをしからなくに

〔拾遺集〕恋一・六八六 源経基

あふことのこのよならねばいとどしくしなむいのちもをしからぬかな

〔経盛集〕恋・八一

などの先行歌を参看したと考えられる。「しなんいのちもをしからなくに（をしからぬかな）」は恋の歌の常套的表現と言えるだろう。他方『平中物語』第一段の和歌と照らし合わせると、ここでは二句めまでの表現が一致するのみならず、「残されて嘆くよりも身を投げて先立つことを選ぶ」というモチーフまでもが同じである。それだけではなく、『平中物語』第一段と『唐物語』第六話とは和歌が詠まれるまでの経緯にも類似点が多い。

『平中物語』第一段はつぎのように始まる。

今はむかし、男二人して、女一人をよばひけり。先だちてより言ひける男は、官まさりて、その時の帝に近う仕ふまつり、のちより言ひける男は、その、同じ帝の母後の御あなすゑにて、官は劣りけり。されど、いかゞ思ひけむ、のちの人にぞ、つきにける。

状況設定は第六話と同様である。簡単に言えば、女をめぐる争いである点、女が下位の男を選ぶという点が共通する。上官の男は

恋敵を恨み、帝に讒言してその官位を剥奪する。この男は世を捨てたいと嘆きつつも、次の司召に望みを懸けていたのであるが、その官召しにむなしくなりぬれば、思ひ憂はてて、さ言はでえあるまじき人のもとに、言ひやる。

浮き草の身は根を絶えて流れなむ涙の川のゆきのまに

とあるを見て、「さりとて、ふとはえ行きはなれじ」と思ひて、返し、

をくれゐて嘆かむよりは涙河我降りたゝむまづ流るべく  
すつかり失望し、「根を絶えて」この世から流れ去ろうという男に対し、女は「をくれゐて……」の和歌で答える。

一方『唐物語』では、石季倫の投げかけた言葉に緑珠は身を挺して応えるのである。季倫の言葉、「たれゆへにかはかくなりぬる」からは『古今集』恋歌四および、『伊勢物語』第一段で有名な「みちのくの忍ぶもぢずりたれゆゑにみだれそめにし我ならなくに」も思い起こされる。これに対して緑珠は何も口にするわけではないが、作者が緑珠になり代わり和歌を詠むことで呼びかけと応答の構図が生まれる。これは実際の会話や和歌の贈答によるものではないが、構図としては贈答歌のそれに見立てられ、『平中物語』における男と女の和歌のやり取りを彷彿させる効果をもたらしめていることが指摘できよう。

ちなみに典拠を同じくする『蒙求和歌』では、古註『蒙求』の傍線部を「汝がためにたちまち命をうしなはむことのいたみ思にあらずと云に、緑珠きゝもはてず。なむちがつみをえむことわれ

ゆゑなり。われまづ命ををへむと云て、なく／＼楼よりおちてしに、けり」として、最後に和歌を載せている。中国故事に基づき、和歌を有するという点において、『唐物語』と『蒙求和歌』は類似するが、『唐物語』の場合には物語と和歌が不可分の関係にあり、和歌が物語中で機能しているという点が大きく異なる。

これまで見てきたことから、故事の主題部分のみを抄出し、『平中物語』の一場面を援用して緑珠の貞節を強調するという、『唐物語』の改作ぶりが看取される。原話には緑珠が死を以て罪を贖つたという印象が強い。また『蒙求和歌』の緑珠譚は、恋部ではなく哀傷部に採られている。しかし『唐物語』では、『平中物語』に擬すること、および作中歌に恋の歌の常套句を用いることで、緑珠の愛情が前面に押し出される結果となっている。

『蒙求』は当時広く流布していたから、『唐物語』の読者にとって、『緑珠墜楼』の故事が耳新しいものであったとは思われない。緑珠の物語に皆が熟知する『平中物語』を組み込むこと。それは安直な模倣ではなく、作者が意図した『唐物語』という作品の固有性の確保であったと考えられる。先に見たように二話の構造は近似しているが、それぞれの織りなす世界にはかなりの隔たりがあることに気が付く。『平中物語』の和歌の作中主体は真に死を覚悟しているわけではない。男は悲嘆しきつてゐるが、女の方は「さりとともふとはいき離れじと思ひて」歌を返す。この場面の眼目は女の当意即妙の返歌にある。

それに比べ緑珠の状況は切迫している。石季倫の言葉を受けて実際にその命を絶つのである。このように本話は、和歌を媒介と

して『平中物語』の一場面を利用しながら、典拠である古註『蒙求』とも摂取した『平中物語』とも異質の、独自の物語世界を展開していることが指摘できる。

『唐物語』では緑珠の行為を「いとかく思とりけむ心のありがたさといひつくすべからず」と評する。この言葉だけでは賛辞が緑珠個人に向けられるものか、日本と中国の類似譚を比較する意味を含むものかは判断できないが、少なくとも『平中物語』と引き比べることで、緑珠譚の「ありがたさ」および、「大和」の物語に対する「唐」の物語という作品の固有性が一層明瞭になったことは確かであり、『平中物語』の女への皮肉な視線が伝わってくるようにも感じられる。

#### 四

第二話は『白氏文集』卷十二の「琵琶行」をもとにしている。

むかし元倭十五年の秋、白樂天<sup>a</sup>つみなくして江洲といふ所にながされぬ。つぎのとしのあきりえのほとりによるともをくくりけり。まつかぜなみのをと身にしむゆふべ、うれへの涙いとをさへがたく、さよもふけゆくほどそらにすみわたる月のひかりなみにしたがへるを見ても、我身ひとりしづまざりけりとおもひみだれつゝ、ひともなきさを物こゝろばそくてあゆみ行に、なみのうへはるかに、びはのしらべさま／＼にきこえて、かきあはせなどのありさま世にたぐひなきほどなり。これをきくにあやしき心をさへがたし。あま人もの／＼ふよりほかにたれかはまたなきけあるべきとおぼえけれ

ば、こゑをしるべにてたれの人にかたつねとふに、我はこれあきびとのめなり（中略）かゝるまゝにはたゞむなしきふねをまもりつゝ秋の月のすさまじきをのみみるといへり。白樂天我びはこのこゑをきゝてうれへふかし。又このかたらひをきくにとりかきねたる心地す。われも君もうれへのこゝろおなじからずや。かならずそのうれへのつきせぬことをおもひしるべし。我いむじとしの秋よりつかさのがれみやこをはなれてこの所にしづめり。またやまひのむしろにふしてたちある事たやすからず。もともこゝろばそきうみづらのなみかぜよりほかにたちまじる人もなきすみかに、あしうは葉をわたるあらし、をちこち人の船よばふをとのみきこえていまだがくのかゑをきかず。こよひの君が琵琶のこゑをきくに、ほとと天のがくをきくがごとし。これをきくひとみな涙をながせり。そのなかにも白樂天ひとりたもとくちぬとみえけり。いにしへにありへしことをつくさずば袖になみだのかゝらましやは

この人は世中の人の心のみなにでれるをうしとやおもひけん、ひとりすましてつねはみやこにあとをなんとゞめざりける。  
『源氏物語』須磨・明石巻が「琵琶行」をふまえていることは改めて言うまでもないが、傍線cの「こゝろばそき」以下のくだりは逆に、須磨巻の冒頭、須磨での隠棲を決意する光源氏の心中描写、「心ばそきうみづらのなみ風よりほかにたちまじる人もなからんに」に拠っている。<sup>(16)</sup>この表現を引用することで須磨の情景が『唐物語』に取り込まれるわけである。これについては小

峯氏が「須磨・明石巻における琵琶引の重層、それがそのまま逆転した形で唐物語に投影している」ことを指摘している。<sup>(17)</sup>

また、傍線aの「つみなくして」には源顕基の「罪なくして配所の月をみばや」<sup>(18)</sup>が、傍線bの「我身ひとりはしづまざりけり」には『詞花集』三三七番の藤原顕輔の和歌、「なにはえのあしまにやどる月みればわが身ひとつもしづまざりけり」がふまえられて<sup>(19)</sup>。すでに述べたように、先行作品の一節を引用することによって表現が喚起する印象を重層化する叙述方法は『唐物語』に特徴的なものであるが、この効果は一樣ではない。本話において「こゝろばそき」以下の引用がもたらす影響は大きく、第二話の描く「琵琶行」のイメージは須磨・明石巻と二重写しになつていくのだが、第二話で重ねられているのはそれだけではない。じつは、薄雲巻における光源氏の回想も背景に浮かび上がるような仕掛けがなされており、作中の和歌がその核として有効に機能していることが指摘できる。

本話の「いにしへに……」という和歌は、一義的には白樂天に対する作者の感慨を詠んだものであるが、次の二首を参考にしたと考えられる。

いにしへの昔のことをいとゞしくかくれば袖に露かゝりける

（『源氏釈』）

ひとめをもつつまぬ物と思ひせば袖の涙のかからましやは

（『拾遺集』恋二・七六四 実方）

第二話の作中歌はおそらく『源氏釈』の和歌を下敷きに、実方歌の語法や表現を摂取したものであろう。実方歌には「しのびて物

いひはべりける人のひとしげき所に待りければ」という詞書がある。恋の歌における忍ぶ仲ゆえの表現を、『源氏物語』では昔を偲ぶ涙として転用している。表現の上でより直接的な対応がみられるのは実方歌だが、注目すべきは『源氏歌』に引かれる和歌の方である。

『源氏歌』ではこの和歌を『源氏物語』薄雲巻の「かくればとにや少し泣き給へはひ」の引歌として紹介している。名高い春秋比較論の導入となる一節、光源氏が里帰りをした梅童女御とともに、過ぎ去った昔を回想するくだりである。

秋のあめいとしづかにふりて、おまえのせむざいどもの、色くくみだれたる露のしげさに、いにしへのことかきつづけおぼしいでられて、御袖もぬれつゝ、女御の御かたにわたり給へ略ゝむかしの御事ども、かの野宮に忍てたちわづらひしあけぼのなごきこえいで、いものあはれとおぼしたり。宮も、かくればとにや、すこしなき給へはひとらうたげにて、うちみじろぎ給ふほども、あさましくやはらかになまめいてぞおはすべかめる。

つづいて光源氏は、六条御息所との思い出、須磨から戻つてのこと、女御への秘めた恋心など、すき心から物思ひの絶えない我が身を語る。

「いにしへの…」の和歌について『河海抄』などでは小町姉の作としているが定かではない。出典は未詳だが、引歌と指摘されることはこの和歌が人口に膾炙していたことを示唆するものであろう。すくなくとも『源氏物語』の作者およびその周辺では、『源

氏物語』の一節と「いにしへの…」の和歌との関連は認識されていたと推測される。したがって『源氏物語』作中の和歌ではないが、これをふまえることは即ち、薄雲巻の本場面を想起させる効果を図ったと認めてよいであろう。

先の総合巻では梅童方と弘徽殿方が総合で競い、光源氏の須磨の日記によつて梅童方が勝利を収めるのだが、「いにしへのこと」に思いをはせるとき、須磨での謫居は光源氏には触れずにいられない日々であつた。一時は左遷の憂き目にあうが帰還することを得た白楽天と、須磨に退いたものの今では帝の後見として栄華を極める光源氏。須磨巻では光源氏を白楽天に譬えることで、都に返り咲くことを願うのだが、『源氏物語』では流謫の地で失意の底にある白楽天の昔語りに、帰京を果たし政治的な勝利を手中にした光源氏の昔語りを重ねるといふ、逆の構図が看取される。

しかしながら、『源氏物語』に描き出される白楽天の遁世的な態度は政界に復帰し隆盛をきわめた光源氏とは相いれず、白楽天の実像とも異なる。話末評の言葉に従えば、白楽天は自らの意思で都を離れたことになるが、このことは、冒頭の「ながされぬ」という記述と齟齬をきたすようにみえる。この揺れについて池田氏は、『源氏物語』明石入道の間像が白楽天に影響を与えたという見解を示している。だが、すでに述べたように、最初の設定そのものが顕基説話をふまえた自発的な隠遁の志向を含むものであつて、本話は一貫して退隱意識を基調としているのである。

話末の「ひとりすましてつねはみやこにあとをなんとぞめざりける」という一条は、小峯氏の指摘にあるように成範の志向を示



すものとして注目される。傍線dからはやはり、屈原の『楚辞』「漁父」の詩句が想起されるが、これによって冒頭の志向が再確認され、物語全体が捉え返されるのである。

『唐物語』には、「心」という言葉が繰り返し登場し、そのありように強い関心が寄せられている。人間の「心」は多様だが、『唐物語』が理想としたのは「心をすまず」という境地である。このことは、第一話の王子猷の話、第十一話の簫史と弄玉の話などに端的に示されている。見てきたように、『唐物語』における白楽天像は光源氏のイメージを軸に形成されていることがいえるが、『源氏物語』の利用に終始せず、顕基説話や引歌の世界をからめて新たな展開を図った物語を、屈原の境涯に重ねた話末評で捉えなおすことによって、白楽天の隠者的な性格を強め、『唐物語』が好む脱俗志向の物語に仕上げていることが指摘できる。

## 五

以上のように、『唐物語』には、和歌によって先行する物語作品の一面を取り入れ、自らの物語に重ね合わせるという物語取りの手法が自覚的に用いられていることが認められる。『唐物語』という作品の特徴は中国の故事を独自の物語として再生させたところにあると言えるが、本稿では翻案の手法のひとつとして、著名な和歌に内包される背景や情調の重層化・複雑化の効果を図ったこと、さらにはそのことによって『唐物語』の特異性が看取されることに注目してみた。

『十訓抄』には成範が女房から詠みかけられた和歌に対し、そ

の一字を書き替えて返歌とした話がある。<sup>(23)</sup> 偶然の符合だがこの逸話は、第八話で見た成範の翻案態度に通底しているといえよう。また第六話では、物語取りの手法で『平中物語』を撰取していること、緑珠と『平中物語』の女の対照効果によって故事に「心」による意味付けがなされていることを考察した。話末評にみられる説示性は説話の特色のひとつとされるが、本話では和歌もまた話末評と呼応して話の説示性と結びついているところに、歌物語の和歌との相違が看取できる。

最後の第二話では、作中歌における先行歌の引用が和歌を二重写しにすることで歌の世界そのものを複雑化するだけではなく、それによって入れ籠のように薄雲巻の一面を誘引し、薄雲巻の世界を第二話の物語世界全体に重ねることを狙ったものであることを考察した。漢籍を想起させる先行の物語作品を射程に入れ、漢籍も先行物語も同時に相対化する。『唐物語』の作中歌は和歌のもつことばの歴史性を十二分に活用している。これが先行物語の漢籍への依拠と著しく相違する点は、この相対化の際、漢籍を基調としつつも、和歌を用いた物語化によって典拠の拘束を離れ、典拠を素材として再構築してゆくところにある。

これらの三話と同様の手法は、第十二話、第十八話、第二十四話にも見出すことができる。特に第十八話には『長恨歌』および『長恨歌伝』『楊太真外伝』を典拠としつつも、直接それに拠るのではなく、『源氏物語』に依存する表現や場面形成が随所に見出せるが、これらの検討は別の機会に譲ることとする。<sup>(24)</sup>

『唐物語』には表現が担う伝統的なイメージを利用した表現形

成が顕著なことは先にふれたが、作中歌は物語や場面主題を集約しており、和歌に先行歌の表現を引用することの効果は、地の文における引用とは比較にならない。それはイメージの重層化にとどまらず、翻案の核となつて物語の構造に密接に関わっていることが指摘できる。さらには、翻案という一見原作を踏襲するのみの、非創造的と見なされがちな営為に、独自の世界を創出する可能性が潜んでいることを、和歌が示しているときえいうことができる。漢籍の世界に我が国の先行する物語や和歌を融合させ、独自の物語として再構築するという手法は、共有の古典世界という基盤があつてはじめて可能なものであり、当時の歌界における古典撰取の動向、なかでも俊成らによつて本歌取りや物語取りの技法が方法化されつつあつたことも無縁ではないだろう。

今回は作中歌の機能に焦点を絞つて考察した。『唐物語』における先行作品の撰取については、他の角度からも詳細に検討し、個々の引用の有機性に言及する必要があると思われるが、それについては今後の課題としたい。

注(1) 池田利夫氏「日中比較文学の基礎研究 翻訳説話とその典拠」

(笠間書院 昭49・1)

(2) 吉田幸一氏「『唐物語』の成立年代考」(『異本唐物語』古典文庫 平5・7)

(3) 山岸徳平氏「中国説話の大陸の素材——蒙求及び唐物語と蒙求和歌に就いて——」(『国語と国文学』18・10 昭16・10)

(4) 小峯和明氏「唐物語の表現形成」(『和漢比較文学叢書』第四巻 汲古書院 昭62・2)

(5) 太田晶二郎氏「『桑華書志』所載「古蹟歌書目録」」(『日本学士院紀要』昭29・11)に、同目錄第十六雑の「漢物語」帖成範

作」という記事が紹介されて以来、藤原成範作者説はほぼ定説となつており、本稿でもそれに従いたい。田渕旬美子氏「藤原成範小考——『唐物語』の和歌を中心に——」(『人間文化研究年報』10 昭62・3)

(6) 中村文氏「信西の子息達——成範・椿賢・静賢・澄憲を中心に——」(『和歌文学研究』53 昭61・10)にも指摘がある。また成範の活動については青木賢豪氏の「藤原成範年譜考」(『講座平安文学論究』第三輯風間書房 昭61・7)に詳しい。

(7) 中村氏前掲論文。  
(8) 小峯氏前掲論文。

(9) 以下、「唐物語」の本文は、池田利夫氏「唐物語 校本及び総索引」(笠間索引叢刊48 笠間書院 昭50・4)による。本文の異同に関しては問題となるものを右に示した。

(10) 和歌の引用は、「源氏釈」をのぞき「新編国歌大観」による。

(11) 浅井峯治氏「唐物語新釈」(有精堂 昭15・9) 他。

(12) 「唐物語」が参考にした和歌として、田渕氏の前掲論文では、藤原長家の「もろともにながめし人も我もなき宿には月やひとりすむらん」(『後拾遺集』雑一・八五五)が指摘されている。

(13) 古註「蒙求」の本文は「蒙求古註集成」所収の岡白駒箋注本による。

(14) 「平中物語」の本文は日本古典大系による。

(15) この他にも「ひとつてならざらんこと」は「後拾遺集」恋三・七五〇「いまはただおもひたえなんとばかりを人づてならでいふよしもがな」(藤原道雅)、「色にいでぬ」は「拾遺集」恋一・六二二「しのぶれど色にいでにけりわが恋は物や思ふと人のとふまで」(平兼盛)によることが指摘されているが、いずれも恋の歌であり、第六話を恋の物語として造形する意図がうかがわれる。

(16) 浅井氏前掲書解題による。

(17) 小峯和明氏「唐物語小考」(『中世文学研究』12 昭62・2) 本論文、前掲論文ともに、表現およびイメージの形成に関する綿密な考察がみられ、作品と成範との相関についても示唆に富む。

(18) 注(17) 掲載論文。

(19) 清水浜臣「唐物語提要」に指摘がある。

(20) 『源氏物語』の本文は『源氏物語大成』河内本による。『源氏物語』伝本中最大の差異を示すと言われる「大波美蓉もげにかよひたりしかたちを」以下の部分は『唐物語』にも引用されるが、この引用表現は河内本の本文に近似することが指摘されている。

(21) 池田氏前掲書。

(22) 注(17) 掲載論文。

(23) 『十訓抄』第一「可定心操振舞事」の二十六に、配所から召還されて後、参内した成範に女房が「雲の上はあり昔にかはらねど見し玉だれの内やゆかしき」とよみかけたのに対し、「内や」を「内ぞ」と一文字だけを改めて返歌とした話がある。

(24) 参考までに、先行する物語作品の和歌をふまえて詠まれたと考えられる和歌について、作中歌と参考歌を列挙しておく。

#### 【第二二話】

ことはりや契りしことのかたければつゝみにはいしとなりけるかな

あふことのかたきなげきにこひしなばわれもや野べのいしとなりなん

たのめつつきがたき人を待つほどにいしに我が身ぞなりはてぬべき

〔和歌色葉〕二〇〇 しらの姫君

#### 【第一八話】

すがたこそはかなき世々にかはるともちぎりはくちぬものとこそきけ

宇治橋の長さちぎりは朽せじをあやぶむかたに心さわぐな

〔『源氏物語』浮舟・七三九・七四〇 薫・浮舟〕

別れにし道のほとりにたづねきてかへさはこまにまかせてぞゆく  
ゆふさればみちもみえねどふるさはもとこしこまにまかせて  
ぞゆく

〔『大和物語』第五六段・七五 兼盛〕

ひかりさすたまのかほばせしはたれてなをそのかみの心地こそすれ

身こそかくしめのほかなれそのかみの心のうちを忘れしもせず  
しめのうちは昔にあらぬ心地して神代の事も今ぞ恋しき

〔『源氏物語』絵合・二八一・二八二 朱雀院・梅盛〕

しらざりしたまのうてなをしりえてぞよ半のけふりと君もなりにし

たづねゆくまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

#### 【第二四話】

〔『源氏物語』桐壺・六 桐壺院〕

いとどしくなぐさめがたきあきのよにまどうつ雨ぞいとどわりなき

わがころなぐさめかねつさらしなやをばすてやまにてる月をみて

〔『古今集』雑歌上・八七八 よみ人しらず〕

いとどしくなぐさめがたき夕暮れに秋とおぼゆる風ぞ吹くなる

〔『後六々撰』二七〇 道清〕

いとどしくさびしき秋の夕暮れに窓うつ雨の音さへぞする

〔『和歌一字抄』八七四 念西入道〕

#### 【付記】

本稿は、平成六年度早稲田大学国文学会秋季大会の口頭発表をもとに成稿したものです。席上御指摘を賜った方々、成稿にあたって御助言をいただいた方々に感謝申し上げます。また兼築信行氏には参考資料に關してもご教示をいただきました。改めて厚くお礼申し上げます。